



TCアルプ 結成10周年。そして、「土砂降りボードビル」特別インタビューの上演に寄せて～



はじめまして！松島中学校 2 学年です。今回、職場体験ということで、まつもと市民芸術館に 3 日間おじゃまさせていただきました。その中で、まつもと市民芸術館を拠点として活動されている劇団「TC アルプ」のみなさんにインタビューをする機会をいただきましたので、その様子を紹介したいと思います。

インタビュー①

近藤 隼 × **武居 卓** × **深沢 豊**

—近藤さんと武居さんに伺います。新しいメンバーが加わって何か変わったことはありますか？

近藤 まず、新鮮ですよ。 (新メンバーが入る前の) 4 人で活動している期間が長かったから、だんだん考えも似てきてしまう。そこに新しいメンバーが入ってくることによって、新しい“ノリ”ができたりしています。

武居 自分たちにはないものを持っている強力なメンバーに入ってもらったので、できることが増えたり、できなかったことができるようになったり……。TC アルプが大きく変わっていくきっかけになると思います。

—深沢さんは、TC アルプに入って大変だったことはありますか？

深沢 もう毎日が大変ですよ (笑)

僕はまつもと演劇工場(シアターファクトリー)という市民参加型の演劇集団に参加

していたんですけど、改めてお金をいただいて演劇をするという、その心がまえを持つまでが大変でした。

—10周年を振り返って、ここまで続けてこられた理由はなんですか？

近藤 やっぱり、好きだからやり続けられたことですよね。

武居 そうですね。あと、最初に始めた時に、大きな理想をもって串田さんの元に集まったんです。それを達成するには、まだまだ時間がかかるし、10年ばかりではきっと達成できないとも思っている。まだ準備しながら進んでいる感じで、達成したい目標がたくさんあるから続けていけるんだと思います。

深沢 その達成したい目標というのは何ですか？

武居 松本でやっている芝居を観るために、色々な所から人が来るようにしたい。演劇を観に東京へ行く人はいっぱいいるけど、松本で同じことができればすごいと思う。日本は東京にいろんなことが集中してしまっているけど、それを変えたいという気持ちで集まったのが僕たちなんです。だから、それが目標であり、松本で活動する大きな意義でもありますね。

—現在初めてのオリジナル作品「土砂降りボードビル」を上演中ですが、何か大変だったことはありますか？

近藤 脚本を書いたり演出したりする(ことが本来の役割である)人がいない集団なので、今回はみんなでやりたいことをやろうという感じの作品なんです。いつもなら串田さんが演出をしてまとめ上げていくんですけど、そこが自分たちだけで作り上げる中では大きな壁でした。



【近藤 隼】

深沢 最終的にどういう形になるのかわからない。そんな状況を楽しみながら作っている感じでした。そこが、大変だけどおもしろいところでしたね。

—お客さんの反応はいかがでしたか？

武居 思っていたよりも反応は良かったですね。何を見ておもしろいと思ってくれているのか、いろいろ考えたりしているんですけど。たぶん、役者だけで作ったから「(役者としての) こんな自分を見て欲しい」という部分がどの芝居にも出ている。内容よりもそういう所だと思う。目の前で役者が自信を持ってやっているのがおもしろいのかなと思いました。

深沢 なんとなくの印象だけど、「そろそろアルプがこんなことをやってくれるんじゃないか」みたいな期待感が街の中にあると思うんです。そして、今回のような「役者の側から提示するお芝居」が、その期待にいい形で応えているんじゃないかと思います。



【深沢 豊】

—10周年を迎えての新たな目標はありますか？

近藤 やっぱり、いろんな人に観てもらいたいかな。

武居 そうだね。いろんな人に観てもらい、知ってもらいたい。そのきっかけを作るためにも面白い作品を作り続けなきゃいけない。今回は芸術館を飛び出している公演でしたが、お客さんもどんどん増えていって手応えを感じたので、今後も外に出て行くことはやっていけたらと思います。



【武居 卓】

—はじめて松本市に来たときの一番の印象を聞かせてください。

近藤 寒い！！（笑）

武居 最初来たときはそればかり言ってたよね。

近藤 あとは、（街のサイズが）大きすぎず、小さすぎずという感じで。ちょうどいい規模だなと思いました。

武居 あと、独自の文化がちゃんとありますよね。また、その魅力をキープしながら発展しているところが他にない特徴だと思います。

—松本市のおすすめスポットやお店とはありますか？

深沢 芸術館の上のトップガーデンですね。景色がすごいきれいです。あと、食事をするなら「蕎麦倶楽部 佐々木」さんですね。

武居 僕は近所なんだけど。美ヶ原温泉を抜けて、さらに細い道をずっと上がっていくんです。そうすると入っていいのかわからない道にたどり着いて、それをさらに上がっていくと途中で道が終わってしまって。せっかくここまで来たのに！と思って振り返ると、松本の街が一望できる。

近藤 劇的じゃん。それは歩いていけるの？

武居 歩いていける。今でも年に一回は行くよ。

（以上、インタビュアー：御子柴）

インタビュー②

細川貴司 × 下地尚子 × 草光純太

—10周年を迎えて、今のお気持ちはいかがですか？

細川 10年いるとは思わなかったなあ。メンバーの中に松本の人はいないし、3年ぐらいで帰るのかなと思っていたらいつのまにか10年たっていました。結構大変だったな……。でも、ちょっとずつだけ応援してくれる人が増えてきて、やってて良かったなと思っています。

下地 私は6年目になるんですけど、自分が来てからの5年間で（TCアルプを取り巻く環境は）だいぶ変わってきている感じがしています。

細川 僕たちが来たばかりの頃は、チラシを配りに行くと、商店街の人に「私達は芸術館に反対なの」と言われてチラシをつき返されたりもした。今は町の中をみても松本市は演劇のポスターが多いと思う。下北沢って演劇の町って言われてるけど、たくさんのポスターが貼られていても、誰もそれをみていない。でもこの町だとポスターをみてくれていて、お店の方が「このポスターこの前見ましたよ。何人かで行こうと思ってたんだ」と言ってくれる。そういうことがちょっとずつ増えてきて、変わったなあと感じます。



【細川貴司】

草光 僕は入って1ヶ月もたってないんですけど、10年前から彼らのことは知っていて、時々松本に来ては、彼らの芝居を見ていました。以前に比べると、訪れたお店で芸術館の話題が出ることも増えました。芝居の面で言うと、今回一緒にやってみて、彼らもこの10年ですごく鍛えられて、変わったなあと感じます。

—ここまで続けてこられた理由は何ですか？

下地 お客様と町が少しずつ変わってるっていう感覚がおもしろいから、松本からはなれられない。それが理由の一つとしてあるだろうと思う。あとは、この人たちとつくる芝居が好きだから。

細川 最初の何年かは意地。これで帰ってたまるかバカヤローと思った。この人たちでつくるものは楽しいんだとか、それを実感するまでには時間がかかる。でも、だんだんこういうお芝居をこのメンバーとならできるということがわかってきて、応援してくれる人も増えてきたのが大きかった。

— (草光さんは) なぜ TC アルプで活動しようと思ったんですか？

草光 TC アルプの立ち上げの前から串田さんとは関わりがあって、レジデントカンパニーをつくることも知っていた。立ち上げに参加はできなかったけど、当時からずっと気になる存在ではありました。この夏にシアターキャンプ(まつもと市民芸術館主催の合宿型ワークショップ)に誘ってもらって、1ヶ月間、彼らと同じ時間を過ごした。その中で、TC アルプが松本で10年間やってきた力を感じた。自分はここ3年くらい裏方をやっていて、ずっと舞台の上に立ちたいという気持ちがあったんです。だから、一番いいタイミングで誘っていただいて、もう一度ここで役者としてやっていこうと思った。仲間にも恵まれているし、串田さんが松本でやろうとしている純粋な芝居作りにも賛同しているので、思い切って松本へきました。

—草光さんが新メンバーで加入して、何か変化はありましたか？

細川 草光さんは僕の4つ上の大学の先輩でもあるんです。これまで重ねてきた苦労も含めて、経験豊富な先輩に入ってもらうことで引き締まるというか、(草光さんが)何を考えているんだろうとみんなが思いを巡らせる。前からいる4人だと、だいたい方向性がわかるからね。「この人は何をやる気なんだ!？」という人がいてくれることは大きい。

下地 一緒に作品をつくるのは今回が初めてですけど、すでに新しい風を吹かせてくれてる気がします。芝居の大先輩である草光さんと、まだお芝居をはじめたばかりの深沢さん。対極的な新メンバーを迎えて、何が起ころのか分からない座組みになっているから面白いですね。

細川 この前、みんなで打ち合わせをしている時に草光さんがすごく険しい顔をしていて、何か怒ってるんだと思ってずっとドキドキしていたら、ただ眠かっただけだったという(笑)

一同 (笑)

下地 そんなことあったんだ(笑)

細川 そんな、かわいらしい先輩です。

—「土砂降りボードビル」を上演してみて、お客さんの反応はいかがですか？

下地 今回の作品は会場が劇場ではないし、色んな人に見に来て欲しいねって話していて。だから、基本的に笑わせにかかる芝居が多いんですけど、打った分だけ反応が返ってくるというか、ちゃんと面白がってくれているなど感じています。あとは、即興（アドリブ）から作ったお話が結構多いので、即興ならではの面白さが伝わったり、伝わらなかったり。演じながらも、その反応を楽しんでいます。



【下地尚子】

細川 今回は長い期間やるので、とにかく楽しませたいというのが最初にあった。お芝居にもいろんな種類や楽しみ方があるけど、仕事終わり、学校終わりにパッと立ち寄って、パッと帰れるようなものになるといいなと思って作りました。「面白かったよ！」「分かりやすかったよ！ありがとう！」という声をかけてもらいます。

もちろん、芝居はこれだけじゃないよって気持ちもあって、これをきっかけに芸術館に来てもらって、色んな芝居を楽しむきっかけになってくれればと思っています。

草光 今回はこういう（ギャラリースペースのような）会場でセットも組んでいないし、役にぴったりの衣裳を身に着けているわけでもないから、お客さんが想像してくれることを期待して作っている部分があります。だけど、観てくれているお客さんは前のめりで、それぞれが想像しながら観てくれているのを、演じながらも感じています。それはすごく演劇的なことだし、嬉しいことですね。



【草光純太】

細川 僕らは映像に撮っても絶対に伝わらないものをここでつくりたいと思っていたから、想像しながら観てくれているというのはとても嬉しいですね。

— 10周年を迎えて、今後の目標はなんですか？

細川 TC アルプが松本で作ったものを、色んな所から観に来てもらえるようにしたい。もっと町と劇場と演劇が一つになっていくようなことを仕掛けて、この町にこないと観れない、体感できないものを作っていきたい。新しいメンバーも入ってきて、グンと伸びて、そういうこともできればと思っています。

下地 自分は卒業して間もなく松本に来て、周りからは「何やってんの？」と言われることがありました。でも、松本ではすごいことをやっていて、観に来て欲しいんだけどそれを届けられないジレンマを感じていた時期もあった。でも5年、6年と活動を続けてきて「頑張っているね」と言われるようになってきた。だから、「松本に行けば何かが観れる！」という、そんな期待感が持てるようなことをしていきたい。

草光 TC アルプが10年間積み上げてきた活動をさらに勢いづけたい。この10年で出来上がった物を一回壊してでも、起爆剤となって、さらに大きなことができたらなあ。日本はなんでも東京に集中しすぎるけど、海外に目を向けるといろんな街にそれぞれの文化が育っている。同じ場所や価値観に偏らず、色んな所で熱を感じられるようになっていったらいいな。

(以上、インタビュアー：山田)

いかがでしたでしょうか。

以上がインタビューの様子でしたが、これはほんの一部です。

TCアルプのみなさんはとても気さくな方ばかりで、どんな質問にも笑顔で答えてくださいました。

私達も初めてのインタビューで緊張してしまいましたが、それも最初だけで、みなさんのお話を楽しく聞くことができました。

TCアルプのみなさん、今回はいろいろと多忙な中、お時間を取っていただき、ありがとうございました。

貴重な体験ができ、とてもおもしろかったです。これを読んでもらった方で、まだTCアルプさんのお芝居を見ていない方がいましたら、是非足を運んでみてはいかがでしょうか。

(以上、撮影・編集：船坂)